

ビジョン検討にあたっての主な論点について議論した結果の整理

ビジョン検討にあたっての主な論点1.、2.、3.、4.、6.、の議論で出た意見について、意見を各項に振り分けなおし、共通するテーマやビジョンの骨格・構成に関する事項ごとに整理した（再掲あり）。

- 黒字：平成29年度第1回検討会での意見
- 青字：平成28年度業務での有識者及び島内関係者へのヒアリングでの意見
- 緑字：平成29年度現地調査した柴崎委員によるコメント
- 橙字：平成29年度第2回検討会と現地視察での意見
- 紫字：平成29年度第3回検討会と現地視察での意見

1. 前提となる考え方について

1.（1）伝統的な自然観・人と自然との関わり に関する意見

<<山の神、岳参り>>

（岳参り）

- 昔は山頂は神聖な場所だった。神聖な場所であるため、選ばれた人だけが（手足を洗い、裸足で下の川から）山頂に行った。【大山】
- 沖ノ島のように見ることができない場所があってもいい。それも魅力となる場合もある。【大山】
- 50年後の未来に向かって、現在何をすべきかを明確にするために未来像を作るべき。極端な例として、50年後には山頂部は立入禁止にする。それまでの間、人数制限や履き物の規制をかけながら山のあり方を作っていけないものか。【大山】
- 原集落の岳参りでも、早朝海辺で体を清め、水を汲んで山頂まで上がる。（山頂は？）母なる聖地と聞かされた。しかし、山を利用して生計を立てている林業関係者はたくさんいた。【岩川】
- 昔から岳参りは山と集落が関係をもつ機会であったので、心の部分での山との付き合いはあった。
- 屋久島の山岳信仰は仏教よりも古く、仏教が屋久島に入ってきた後は相互理解をしていたと思われる。このため、集落の年中行事は神仏融合になっている
- 山に入るといことはむしろ地元の人には少ないのかとも思う。親の時代には、山に入るのは営林署が主で、それ以外の人にはそんなに入ることもなかった。安房だと、岳参りのときに集落の人と太忠岳とかに登った。そんなにしょっちゅう入る習慣はなかった【泊】
- 祠がそれぞれの集落や地域の方々の信仰の対象となっているという実態がある。これが昔から日本の山にはあって、それが今も続いているということを改めて感じたことが非常に重要【土屋】
- そこに祭られている島民と山、祠との関わりを残していかないといけない。しかしそれ

を大々的に広めるかどうかは考えていかなければいけない【柴崎】

- それぞれの集落の主な神社は、明治時代に国家統制になって、それぞれの地域の神社が統合された。無理に益救神社に統一した。よくわからないところがある。本当は地域ごとに特色があったのではないかと思う。なんとなく益救神社の系統になっている。あちこちにあった祠をかきあつめて、集落の神社に合祀している。本当はもっと集落の中に神社があったと思う【日下田】

(山の神)

- 我々の子どもの頃は、むやみに山に入っただけだとおしかりを受けた。屋久島では山の神が一番偉いということが言われていることに由来。【岩川】
- 山は恐ろしい存在であり、そのような場所には神がいるため人間は一步下がってそれらを崇め奉る存在だったことが「精霊信仰」につながる要因だったと思われる。
- 精神面でも集落と山は密接につながっており、死んだ人は山に登って神様になり、山の上から集落を見守り、時には集落へ降りてくると信じていた。山は信仰の対象であると同時に死んでから行く場所でもあった。

(その他)

- 自分の住む地域の森林を大切にすることが醸成されていることは、他地域にはない特徴
- 歴史的経緯を踏まえ現在の場所の成り立ちを考えると、岳参りでトコロガンが願掛け・願解きを行ってきた場所は「聖地」として守られるべきであり、特に奥岳の峰々の「聖地」性を壊してはならない。安易に人数を増やすような施設整備などは極力控えることが重要。また、原生的かつ「聖なる空間」を体験できるよう配慮が必要【柴崎】
- 日本各地で山岳信仰が廃れていく中、岳参りという風習が残ってきた事実は非常に貴重。これを「屋久島の誇るべきモノサシ」として活かすべき【柴崎】

<<節度、感謝・遠慮の心>>

- 山の神を信仰することは、山を使わない（入らない）ことではない。山の神を大切にし、山を大切に思いながら使わせていただく（入らせていただく）という考え方である。【中川】
- 山から恵みをいただく場合、感謝の気持ち、節度を持って使わせていただくという気持ちが重要である。【中川】
- 利用と信仰は相反するというより、信仰しながら利用するということが、いつも一緒にあるべきものとする。【中川】
- 感謝の気持ちを持つことで素晴らしいビジョンができてくるのではないか。山に入る人には、山に感謝し遠慮の心をもって入っていただきたい。【岩川】

<<畏れ>>

- 単に楽しみにくるだけでなく、山に対して畏れをいだくという部分もあってよい。
- 屋久島の山は近代技術をもって解決できるほど甘い環境ではない。こうした場所では「心（畏敬）をもって取り組むような対応が重要。【柴崎】
- 外国の方が来ても、自然への畏敬というものに基づいて山を訪れることは共通的なものだと思う。それをもう一度復活させて、そういった気持ちをもって山に入っていく。もう一度山を敬う気持ちを大事にして入りましょうということである【吉田】

<<利用するエリアとしないエリア>>

- 山の神を信仰することは、山を使わない（入らない）ことではない。山の神を大切にし、山を大切に思いながら使わせていただく（入らせていただく）という考え方である。【中川】
- 沖ノ島では世界遺産登録をきっかけに入島禁止の検討をしているが、屋久島でもそのような場所があってもいいのではないか。人を受け入れる場所とそうでない場所を明確に線引きし、皆で同じ認識を持つことが重要。【佐藤】

1. (2) 自然環境を損なわない範囲、方法での利用 に関する意見

<<利用するエリアとしないエリア>>

- 沖ノ島のように見ることができない場所があってもいい。それも魅力となる場合もある。【大山】
- 50年後の未来に向かって、現在何をすべきかを明確にするために未来像を作るべき。極端な例として、50年後には山頂部は立入禁止にする。それまでの間、人数制限や履き物の規制をかけながら山のあり方を作っていくものか。【大山】
- 山頂部への立入禁止は厳しいが、闇雲に入るのはよくないことは同感する。【古賀】
- ネット上で情報が流布し、行ってしまう/行けてしまう神聖な岳参りの道について、利用するのか、制限するのか、中間をとるのかの方向性について明確になればよい。【古賀】
- 沖ノ島では世界遺産登録をきっかけに入島禁止の検討をしているが、屋久島でもそのような場所があってもいいのではないか。人を受け入れる場所とそうでない場所を明確に線引きし、皆で同じ認識を持つことが重要。【佐藤】
- 整備する登山道はきちんと整備し、危険な場所などは使わないとしていくのであれば、使う所はどのような利用にしていくのかを検討すべき。【吉田】

<<屋久島が日本・世界に果たす役割・機能>>

(日本・世界の見本となる)

- 日本最初の世界自然遺産である屋久島だからこそ、見本となる自然と人との付き合い方

ができるのではないか。【大山】

(環境学習の道場)

- 環境文化村構想では、屋久島環境文化村を「環境学習の道場」という位置づけで考えていた。屋久島は環境学習の道場になりうる内容と条件を持っているので、このように考えれば、ある程度利用の仕方が見えてくるのではないか。【大山】
- ガイドは、屋久島の魅力を伝え、環境学習の指導者にもなりうる。【大山】
- 屋久島の山には教育的な価値が多分にある。例えば、し尿担ぎは環境に配慮した行為であることとして捉える利用者は多いと考える。し尿担ぎのボランティアを募れば、島外から参加者が出てくると思われる。【柴崎】

1. (3) 屋久島山岳部の価値、魅力、らしさ に関する意見

<<ビジョンの作り方(役割)>>

(ビジョン検討の意義)

- このようなビジョン作りそのものが、屋久島の魅力とは何かという意識を作り上げるきっかけになればよい。【日下田】
- 島民が失っている「山への畏敬の念」を取り戻して、屋久島のこれからはこうあるべきだと理念を示すことが重要である
- 理念を作る際は、過去あったことを文章化するだけではないので、新たに文章にして位置付けていくことも次の発展につながると思われる
- 屋久島の価値は多様な自然の相互関係や人間行為と重層化して存在している。このため屋久島の特徴をなす要素や、その価値は並列的に存在するのではなく、循環的体系をなしているという認識がビジョン検討の前提として必要と思える。【日下田】
- 議論する大きなことは「手引き」の仕方だと思う。例えば「水循環という体系」を立ててみる。あるいは、森林についての筋道をたてる。森林という樹木の筋道を立てるとそこには、過去の伐採もからむ、山岳ということでは岳参りともからんでくる。これは全体の構成の組み立て方に資するものとなる。【日下田】
- 体系的な手引きの筋道を何本柱か考えて、それにいろんな多岐にわたるものをつなげていくと、屋久島独自の計画というようなものを完成できるのではないか。当然のことながら手引きであるので、ガイドの役割も大きく反映してくる【日下田】

(ビジョンの対象範囲)

- 来島者などから、屋久島で生まれ育った自分では感じられない島の魅力(風、水など)を知ることができた。里の部分も含めて議論するならば、「屋久島まるごとビジョン」としてもいいのでは。【岩川】
- 行政は地域住民がいかに活性化するか、集落が活性化するかという論点で計画を作って

いるので、島全体を軸として計画を作って実行していく。色々なビジョン作る時にはやはり島全体（口永良部島も含めて）として考えていきたい【矢野】

（一言フレーズの作成）

- 成果品としても、文章の冒頭には「この成果品は、どのような性格で、どのように役に立つのか」を一般の人にもわかりやすい表現で、冒頭に記しておくとう理解しやすくなる。【日下田】

（新たな「モノサシ」作り）

- 現代的な視点からさらに価値を上げる努力も必要。屋久島の新たな「モノサシ」を作つて、それを世界に発信した方が長期的に価値がある。これからは屋久島の「モノサシ」を世界に発信する時代だと考える。【柴崎】

<<価値・魅力・らしさ>>

（2つの価値）

- 屋久島は、自然そのものの価値と、人と自然とが関わってきたことが評価されてしかるべき。それに見合った管理・運営の体制が整えられることが理想。【日下田】

（恵みと厳しさ）

- 「時に自然の大いなる恵みを感じ、時に自然の厳しさを知る」これが屋久島の価値ではないか。【柴崎】

（海・山・川一体、まるごと）

- らしさについて考える時、海・川を省くことはできない。海・山・川が一体となって屋久島の魅力がある。議論でもこの部分に留意して行う必要。【荒田】
- 屋久島の魅力を伝えるのは非常に難しく、屋久島を一体化して魅力を伝えることになる。【日下田】
- 屋久島の魅力は「まるごと」だと思う。言葉や目に見える形でらしさを作り上げるのは短い時間では難しい。【伊熊】
- 山岳部以外のいわゆる里の観光地もある
- 環境文化村構想で「共生と循環」という言葉があるように、島であるが故に循環的体系を踏まえておくことが重要と思える。【日下田】
- 山への一極集中を分散するためにも里の魅力ということで、財団がやっている「里めぐり」についても利用者数は年々伸びてはいるが、まだ山岳利用には及ばない【吉國】

（奥岳の魅力）

- 奥岳の魅力は、屋久島の魅力（岩、水、緑、自然の厳しさ）など全てが詰まった場所であり、それが「聖地」を構成する要素にもなっている【柴崎】
- 奥岳の一番核心的な部分は何度行っても素晴らしい空間と改めて実感。人工物もあまりなく、とりわけ岩がごつごつした特異的な空間【柴崎】
- 今回は悪天候に見舞われることはなかったが、雨が降ったときには全く逆の顔を見せる。そういうことを感じさせる空間は維持しなければいけない【柴崎】

（自然、景観、利用体験のすばらしさ）

- 屋久島の自然、景観、レクリエーション、登山体験そういうもののすばらしさ、奥深さを改めて認識【土屋】
- 屋久島山岳部の自然、特に奥岳の自然のすばらしさ、世界の中で誇れるもの、これを後世に伝えていかなければいけないという気持ちを改めて思った。奥深い自然体験ができる場所としても、日本国内でももちろんすばらしい有数のものであり、世界にも誇れる【吉田】

（のんびりした時間）

- 現在の屋久島観光は、縄文杉登山など時間に追われるが、のんびりした時間を過ごせる島でもある。【吉田】

（他地域との比較）

- 奄美との比較では、屋久島は観察対象に縄文杉のようなはっきりしたスーパースターがあり、植物の魅力が動物より大きい。【長田】
- 屋久島は花崗岩が地中で固まった後に急上昇してできた山であるために標高差が大きくなり、雨が山肌にしみこまず河川まで流れるため山頂部に大きな岩が見える景観になっている。また、標高差があるために植生の垂直分布が見られる。【吉田】
- 他の山と比較すると「瑞々しいみどりみどりした山」であり、その緑は淡い黄色（落葉樹の新緑）から深い緑（常緑樹）までいろいろあることが特徴【柴崎】
- 里のすぐ近くに一級の溪谷や沢があちこちにある。いたるところで沢水が流れることが特徴【柴崎】
- 地元でゴミを減らす運動に取り組んだことにより、屋久島の山ではゴミを捨てないということが皆の中に意識付けられた。ゴミがないところには観光客もゴミを捨てないことに波及している。他の地域では真似できない屋久島の隠れた魅力【大山、土屋】

（原始性）

- ほぼ手つかずであることから原始性、原生性、神秘性を感じるころ
- 切り株があるところを「原始」とするには難しいが、人の手が入った森でも「原生」を

感じることはできる。

- 花山歩道の魅力は原生性であり、それを確実に保ちつつ利用を進めることが重要。利用をコントロールし、制限の中で利用を進めていく仕組みを作ることが非常に重要【土屋】
- 花山歩道のような原生的な場所でも、以前と比べると少し変化が起き始めているような気がしている。色々な利用のやり方、管理のあり方に今後考えるべき点があるのではないか【柴崎】

(景観)

- 人工物のない解放感のある展望 (注：宮之浦岳など山頂部から展望した場合、登山道以外に人工物はほとんど見えない)
- 特徴的な地形がもたらす景観
- 岩の荘厳さにも価値がある。花崗岩が天からまかれたような風景は、屋久島の幻想的な空間の重要な構成要素【柴崎】

(自然観・人と森の関わり)

- 自分の住む地域の森林を大切にする気持ちが醸成されていることは、他地域にはない特徴
- 森と共に生活があったこと

(水環境)

- 他地域のように山岳部に生息する動物からの影響が少ないため、登山道のどこでも水が飲める。屋久島は「水」のイメージ
- 屋久島憲章でも述べられているように「どこでも、いつでも、おいしい水が飲めること」【柴崎】
- 里のすぐ近くに一級の溪谷や沢があちこちにある。水を通じた美しさ（時に怖さ）はもっと伝えられてよい。【柴崎】
- 水は、森や川をつくり、時には土壌侵食して花崗岩がむき出しになるかもしれない。屋久島憲章にあるように、いつでもどこでもおいしい水が飲めるという「水」は屋久島を構成する根源【柴崎】
- 屋久島を構成する根源はやはり水にあるのかと思う。屋久島憲章で言われたような、いつでもどこでもおいしい水が飲めるという水に対するリスペクト、山に対するリスペクトが大事【柴崎】
- 山の水を汲む場所の水の太さに感動した【羽井佐】

(多様な利用形態の幅がある)

- 原生的な場所から都市的（少し開けた）場所まで、様々なレベルですごいものがある【柴

崎】

- ・人智を超えるような、広大な空間が広がって岩もごつごつしていたり、神聖な気持ちになるような場所（宮之浦岳）
- ・素晴らしい森が広がっている場所（花山、ヤクスギランドや白谷雲水峡も）
- ・巨木や軌道、人との関わりがよく分かるような場所（縄文杉）
- ・里の近くでもすばらしい川や滝がある（宮之浦川、安房川、大川の滝、千尋の滝）

<<屋久島の魅力の伝え方>>

（魅力をどう引き出すのか）

- 「水」、「山・川・海一体」、「まるごと」、「自然との共生」、「宗教的な畏れの考え」といった、屋久島の魅力を定義する必要があり、それをどう引き出していくかというのは、山の文化のためのシステムを作っていくことと同じ【土屋】

（縄文杉登山）

- 良くも悪くも、縄文杉登山は屋久島に行きたいという人の入口となっている。縄文杉登山をきっかけに、より深い屋久島の魅力を伝えることにつながる案内ができるのではないか。【古賀】

（情報発信）

- 屋久島には色々なもの（魅力）があるが、発信が下手なのかもしれない。行政が主導で情報発信の基礎を構築し、効果的に発信していく役目はガイドにあると考える。【伊熊】
- 縄文杉と白谷雲水峡の魅力が突出している。その他の魅力を伝えるのは大変。今後はインバウンドを含めた中でのビジョン等作成となるが、屋久島は環境としてはとてもいいものがたくさんあり、ストーリー性を全面に出していく必要。【後藤】
- 屋久島憲章では水を取りあげている。水の豊かさでストーリーが考えられるのではないか。【大山】
- ガイドをはじめとする島の住民が島の魅力を語ることによって、自然と人がどうかかわっているのか幅広く知ることができる
- 現代的な視点からさらに価値を上げる努力も必要。屋久島の新たな「モノサシ」を作って、それを世界に発信した方が長期的に価値が上がる。これからは屋久島の「モノサシ」を世界に発信する時代だと考える。【柴崎】
- 外国人へは、かならずしもここへ行ったらいい写真がとれるというような情報だけではなくて、森の美しさや畏れを感じられるのはこのコースだといったインフォメーションの仕方もあるのではないかと思う。【吉田】

<<山岳部や登山以外の魅力>>

(山岳部以外の魅力向上)

- 世界遺産登録エリアは山岳部にあるが、今後は、団塊世代以降の体力低下などで山頂まで行かない利用も出てくることが考えられる。里巡りツアーなどで屋久島の魅力を高めていく必要。【吉田】

(多様な魅力の発信)

- また、縄文杉登山者があまりじっくり見ていない、過去の林業など人と森との関わりなども魅力になっていくと思われ、自然だけでない多様な魅力を伝えていくべき。【吉田】

2. 屋久島山岳部の保護と利用の「目指す姿」/「あるべき姿」に関する意見

<<ビジョンの作り方(構成)>>

(未来像を描く)

- 50年後の未来に向かって、現在何をすべきかを明確にするために未来像を作るべき。【大山】
- 50年と100年先を考えた上でビジョンを策定するべきではないか。実際には、50年、100年先はわからないが、今の段階だけをみるのではなくて将来的なことを考えて、それに対応して、今以上のレクリエーション体験を保証することはすごく大事なことだと思う【柴崎】

(一言フレーズの作成)

- 成果品としても、文章の冒頭には「この成果品は、どのような性格で、どのように役に立つのか」を一般の人にもわかりやすい表現で、冒頭に記しておくとう理解しやすくなる。【日下田】

<<目標像の設定>>

- 50年後の未来に向かって、現在何をすべきかを明確にするために未来像を作るべき。【大山】
- あるべき姿を考える時、どの時点の姿を屋久島のありべき姿とするか考える必要がある。【古賀】
- いつの時代に戻るか考えることは非常に難しい。これから将来50年先がどのような時代になっていくのかを考えながら決めるべき。【吉田】

<<次世代への継承>>

- あるべき姿として、これから先に子々孫々に伝えていく形を一つのあり方にしていくという視点も必要。【内田】

<<屋久島が日本・世界に果たす役割・機能>>

(日本・世界の見本となる)

- 日本最初の世界自然遺産である屋久島だからこそ、見本となる自然と人との付き合い方ができるのではないかと。【大山】
- 屋久島の山は近代技術をもって解決できるほど甘い環境ではない。こうした場所では「心（畏敬）をもって取り組むような対応が重要。このような取り組みを世界に発信した方が、長期的には価値が上がる。【柴崎】
- 屋久島だからできることの一つとして、「新たな山の文化」みたいなものを屋久島から発信できるのではないかと。屋久島に貢献できるようなことなら、その意味をキチンと伝えれば携帯トイレのような多少の不便があってもすばらしい体験の一つとして受け入れられるのではないかと【柴崎】
- これまでの欧米のスタイルの体験の質、満足を越えた何かをこちら側から発信することで、屋久島の価値を長期的には高めることになる。そのバックグラウンドとして観光客、登山者が屋久島から誕生するかもしれない新たな価値をささえてくれるのかもしれない【柴崎】
- 柴崎さんからの発言にあったように「新たな山の文化」を作っていくべきである。そこには ROS というようなものも必要だし、トイレの問題といった具体的で、しかし自然体験には関係してくるところをどうしていくか。それと宗教的な畏れの存在も重視する。屋久島はゴミが少ないことの経緯、安全管理をどうしていくか、などをいかに組み込んでいくか。【土屋】
- 「水」、「山・川・海一体」、「まるごと」、「自然との共生」、「宗教的な畏れの考え」といった、屋久島の、魅力を定義する必要があり、それをどう引き出していくかというのは、山の文化のためのシステムを作っていくことと同じ【土屋】

(環境学習の道場)

- 環境文化村構想では、屋久島環境文化村を「環境学習の道場」という位置づけで考えていた。屋久島は環境学習の道場になりうる内容と条件を持っているので、このように考えれば、ある程度利用の仕方が見えてくるのではないかと。【大山】
- ガイドは、屋久島の魅力を伝え、環境学習の指導者にもなりうる。【大山】
- 環境学習を行う場であるべき
- 屋久島の山には教育的な価値が多分にある。例えば、し尿担ぎは環境に配慮した行為であることとして捉える利用者は多いと考える。し尿担ぎのボランティアを募れば、島外から参加者が出てくると思われる。【柴崎】

(自然・アウトドア志向への入口)

- 素人がきて、その人たちが自然(アウトドア)を好きになって帰って行ってほしい。

<<屋久島の魅力・評価点と管理運営体制>>

- 屋久島は、自然そのものの価値と、人と自然とが関わってきたことが評価されてしかるべき。それに見合った管理・運営の体制が整えられることが理想。【日下田】
- 行政は屋久島ならではの風習や制度を「屋久島のモノサシ」として、国内や国外に普及できるのであれば、特区を申請したり、新たな法律を制定するなどして(管理や運営を)動かしていく断固たる決意を持ってほしい。【柴崎】

<<山岳部や登山以外の魅力の向上・発信>>

(山岳部以外の魅力の向上)

- 世界遺産登録エリアは山岳部にあるが、今後は、団塊世代以降の体力低下などで山頂まで行かない利用も出てくることが考えられる。里巡りツアーなどで屋久島の魅力を高めていく必要。【吉田】

(多様な魅力の発信)

- また、縄文杉登山者があまりじっくり見ていない、過去の林業など人と森との関わりなども魅力になっていくと思われ、自然だけでなく多様な魅力を伝えていくべき。【吉田】
- 荒川登山口から大株歩道入口までの軌道は、し尿搬出やけが人緊急搬出に利用されてきた貴重な存在であり、林業が発展した産物。そうした林業的価値と景観的価値が併存してきた【柴崎】
- 屋久島の魅力が色々なところで外に向かっていっているということについては、地元の人間として誇れる部分【泊】

3. 利用者へのサービスについて

3. (1) 対象者について に関する意見

<<幅広い利用者層への対応について>>

(登山前のレクチャー)

- 公民館等でレクチャーして、それに登山客は事前に参加して、その時に服装や持ち物や心構え、畏敬の念などの、歴史的背景や自然の事などを事前にレクチャーを受けてから入山する制度というのはいかがでしょうか【水柿】
- 今は島に入ってきてから何もわからなくても山に行ける状態である。いわゆる関所を通らなくても誰でも勝手に入れる状態になっている。やはり、事前になんらかのレクチャーを受けて入る仕組みがあった方がいい【中川】

(幅広い利用者層への情報や注意)

- タスマニアの国立公園では、英語が分からない人でも一目見たらわかるようなサインが付けてある。そういった対応が必要になってくると思う。屋久島の場合は、さらに迷いやすさ、滑りやすさ、というような別のマークが必要になるかもしれない【吉田】
- ピクトグラム（視覚記号の一つ）をもっと広める必要がある。そのためにも、林野庁、環境省、屋久島町、鹿児島県、ガイド等で共通のピクトグラムをつくと認識しやすい。白谷雲水峡での外国人利用者は、半分以上が中国、台湾、韓国の方である。このため英語表記では伝わらない。共通したピクトグラムのようなものが必要ではないか【永山】
- 道標に関しては、様々な時代に設置された道標が混在しているため、「健脚向きの表示」と「一般客向きの表示」が混在している。解決としては環境省による目安登山時間を作り、全島的に統一するという方法もある。【柴崎】

<<増加する外国人への対応について>>

(安全な登山のために、注意喚起を促す方法)

- 見た目で見えるようなサインを決めて、コースごとに歩きやすさや困難の度合い、迷いやすさの度合い、雨の降った日は危険というような、どの国の人でも一目見ただけでわかるようなサインを作って表示して、注意を促す。これから外国人観光客や外国人登山者が増えるなかで、そういった対策が必要になるのではないかと【吉田】
- タスマニアの国立公園では、英語が分からない人でも一目見たらわかるようなサインが付けてある。そういった対応が必要になってくると思う。屋久島の場合は、さらに迷いやすさ、滑りやすさ、というような別のマークが必要になるかもしれない【吉田】
- ピクトグラム（視覚記号の一つ）をもっと広める必要がある。そのためにも、林野庁、環境省、屋久島町、鹿児島県、ガイド等で共通のピクトグラムをつくと認識しやすい。ピクトグラムを使って訴える事が必要だと思う。白谷雲水峡での外国人利用者は、半分以上が中国、台湾、韓国の方である。このため英語表記では伝わらない。共通したピクトグラムのようなものが必要ではないか【永山】
- 山のなかでの道標的な看板について、ここは言語ベースでとらえているのだが、ローマ字と漢字というアルファベットベースで考えれば、中国、韓国、台湾、香港、ヨーロッパという山岳部の利用のほとんどの層に対応できるのではないかと【羽井佐】
- 言葉だけではなくてサインでわかる方法を、協力金でなんとかできないかという議論を協議会でしている。【矢野】

3. (2) 質の高い利用体験の提供について に関する意見

<<利用集中および利用集中により生じる問題への対処について>>

(利用者数制限・利用調整の検討)

- 縄文杉に支えられた観光は転換期にきている。人数制限、研修受講、ガイド付き、料金

徴収といった条件設定が必要と思われる

- 公民館等でレクチャーして、それに登山客は事前に参加して、その時に服装や持ち物や心構え、畏敬の念などの、歴史的背景や自然の事などを事前にレクチャーを受けてから入山する制度というのはいかがでしょうか【水柿】
- 今は島に入ってきてから何もわからなくても山に行ける状態である。いわゆる関所を通らなくても誰でも勝手に入れる状態になっている。やはり、事前になんらかのレクチャーを受けて入る仕組みがあった方がいい【中川】
- 入山許可制度は環境文化村構想の時から出ている。当時は、環境文化村センターでレクチャーして入山許可を与えるというようなことも話しがでていた。それはどこが担当するのか？誰が何を進めていくのか？という問題に突き当たる。【大山】
- 利用調整に関する委員会、事前のレクチャー、そういったことに連動した利用調整はかなり議論された。しかし、その中で人数だけを規制しても意味が無いのではないかと言われた。結果的には、人数だけを唱えた案が町議会に提案されて否決された経緯がある。これは、何度も踏んできている事。そのための体制作りは非常に大事である【日下田】
- 縄文杉に初めて 100 人を超える人が来るとなった時には、大騒ぎした。今では 100 人は少ないという時代になった。利用集中の感じ方が変わってきており、ここの設定人数は何人？とするのはむずかしいのではないか。【伊熊】

3. (3) 利用施設の整備と維持管理 に関する意見

<<山岳部利用の原則>>

- 「徒歩利用を」大原則とするという記述に関して、屋久島山岳部は質の高い自然体験を提供する場なのだということをまず大前提として、その上で質の高さというものを具現化する利用方法として今後も継続して「徒歩利用」を位置づけるべき【吉田】

・利用者の多寡やルート難易度による登山道等整備の考え方について

<<登山道整備の考え方>>

(荒廃箇所への目処対処と長期的な管理)

- 人の利用を制限しても浸食は進んで行くと思う。早急な対処をしたうえで、どのレベルの利用をしていくかというゾーニングを検討していく必要がある【吉田】
- 平成 29 年に入ってから台風被害もあって、ここ数年でかなりの荒廃が進んでいる。これは長期的な登山道管理の指針の必要性と同時に、早急な措置が必要ではないか【土屋】

(屋久島の施策・対策)

- これまでの対応は全てなし崩し的に行われたことに対する場当たりの対応しかされてこなかったというのが正直な感想。結果的にそれ（トイレ等の施設整備）でどんどんお客さんが増えるという現象があり、維持管理費が膨大に増えてくることになる。それに

どうやって対応するかを今考えなければいけない時期にきている【柴崎】

- 山奥の場所についてはやはりローテクでやるしかないのではないかと。屋久島の山奥に関してはトイレの話や施設整備の話は覚悟を決めて、やるしかない時代にきているのではと思う【柴崎】
- 科学技術だけでとても対応できる山ではないというのが正直な感想。ローテクでできる限りのことをやっていくという案が結果的には長期的にはローコストにもつながるのではないかと【柴崎】
- 現在のトイレをすぐ壊せということではなく、新設はしないとかそれが使えなくなったら必然的に携帯トイレに移行するという覚悟を決めるくらいがよいのではないかと。縄文杉ルートだから無理なのではなく、むしろ日帰りの方がやりやすい点もある【柴崎】
- 突然屋久島ブームが再燃する事は想定できる。2000年から2010年くらいに起きてしまったことは、今後は起こさせないようにしようというのは、将来の世代に屋久島の美しい自然を体験してもらうためにそういった状態にしないように仕掛けをつくる気持ちは大事だと思う。突然状況が変わることを見据えた上で話しをしていかないと、その時には大変なことになると危惧している。そうならない予防策が必要である【柴崎】
- 観光客が山へ集中している話が多いが、そうならないようにするため、里の観光のあり方もここで議論しないといけないと思う。山への集中が続いているので、里で長く滞在する仕掛けづくりも我々は考えないといけないと思う【柴崎】
- 理想的なことは、環境文化村構想の頃から出ているが、これまで何も進んでこなかった。同じことを繰り返している。町長をはじめとして、地元が主導権、責任を持って進めてほしい【大山】

(登山道整備の考え方)

- 利用者の多寡やルート難易度だけではなく、屋久島の場合は「道の迷いやすさ」という指標もあるのではないかと。そういったものも含めて難易度を決めていくべき【吉田】

(ゾーニングの必要性)

- 利用や保全の水準というのは昨日、一昨日のコースの中でも様々であった。全てを一律で考えるのではなく、それぞれのところに応じた水準というものを設定していくべき【土屋】
- ゾーニングするとき、実際の管理の話になると、行政4者、民間の方々が様々な形で関わっている。この国立公園や世界遺産地域を考えると、行政4者、さらにもっと広げた関係者の協議をかなり密接に色々なレベルでやっていかなければならない【土屋】
- 荒廃箇所への早急な対処が終わった後で、一体どのレベルの利用をしていくかというのはしっかり検討した上でゾーニングして検討していく必要【吉田】
- 全体の来島者数と奥岳への入り込み者数というのもかなり関係あるなということを感じ

た。それは今後のゾーニングを考えていく上でも非常に大事な要素【吉田】

- こういった形で色々な人が入ってくると、地元の人との意識の違いは私も感じる部分がある。ある程度山の中の登山道で、制限というか、気軽に行けるところと、それなりの技量を持った人が行くべき所という整理が今後必要【泊】
- これからはゾーニングが大事になってくる。現状の利用状況もあるが、将来的にどこまで利用を優先するのか、どこまでならバイオトイレが可能かというような物理的なことも関係してくると思う【吉田】
- 屋久島は比較的登山経験がでなくて利用する場所と、ある程度の心構えをもって神聖な山を敬うという気持ちをもって行ってもらいたい所があり、それを区別していく。それに基づいたゾーニングをして、現状と違っていたら、そこをどうするのかというようなゾーニングをしていく必要がある【吉田】

(ルート内のゾーニングの必要性)

- 白谷雲水峡は 20 分ほど歩くと登山道になるが、ヤクスギランドは 50 分コースや 80 分コースがあり高齢者や幼児も楽しむことができる。白谷雲水峡とヤクスギランドでもゾーン分けで差をつけることが必要ではとの意見が出た。
白谷雲水峡内でもさつき吊り橋まで、苔むす森まで、太鼓岩まででゾーン分けが必要かもしれないとの意見も出た【古賀】
- 白谷雲水峡は自然を考えると今のままがいいのだが、安全を考えるとこのなかでランク分けしてもいい【土屋】

(ROSについて)

- 重要なのは屋久島なりの ROS をやっていいということ。合意に基づいてそれぞれの地域でやってもらいたい【土屋】。
- 人々とのかかわりが深く、聖地、森林軌道、林業とのかかわりのある屋久島では、ROS に文化的な手法である COS (Cultural Opportunity Spectrum) とを組み合わせながら整備を考えていったらいいのではないかと【柴崎】
- 日本では ROS 的な発想で管理されてこなくて、大人数での利用に供する形で観光開発、国立公園、世界遺産地域の施設整備が行われてきた傾向がある。その結果、保護地域の一番核心の部分だからこそ、施設整備がされている現状が起きている。それゆえに過剰利用の問題がある。そういった不整合の状態を変えていく、1つの考え方として ROS が参考になるのではないかと【柴崎】
- ROS のままに厳密にやると、いろいろ問題がでてくるが、その方向に近づけていこうという発想は大事【柴崎】
- ROS の考え方は、具体的な管理手法を考える上で非常によいと思う【日下田・中川】
- 環境省が設定する地種区分は、開発等の行為に関する規制である。レクリエーションを

体験する人のリスクに関するゾーニングは今までなかったもので、それで出てきたのが ROS である【柴崎】

- 林野庁でも、以前、レク森担当者と議論したが、管理する立場からは「ここから先は責任をもつ」、「ここから先は責任が持てないので入らないで」という、0か1にしたスタイルだと管理もしやすいので、そういった議論がでてきてしまう。基準がないとそうになってしまう。ROS のような形で、それぞれについてグレードをつけると、それぞれで自己責任の程度が変わってくる。【土屋】

(ROSでの整備区域、レクリエーションの森)

- レク森については、一番利用の初歩的な方でも利用できる場所として非常に重要であり、全体的な位置づけでもはっきり色分けをつけて整備していくことが重要【土屋】
- 屋久島には「どうぞ国民の皆様来てください、レクリエーションを楽しんでください」というレクリエーションの森が5箇所設けられている（ヤクスギランド、白谷雲水峡、大川の滝、千尋の滝、田代浜）。そういったところは可能な限り誰でも行けるように、バリアフリーで体の不自由な方も来て頂けるように整備するという必要も考えている。【川畑】
- ヤクスギランドはコア地域という位置づけとし、縄文杉まで行かなくても十分に楽しめる場所、多くの人を受け入れる場所という考え方を伝える。【柴崎】
- 白谷雲水峡は20分ほど歩くと登山道になるが、ヤクスギランドは50分コースや80分コースがあり高齢者や幼児も楽しむことができる。白谷雲水峡とヤクスギランドでもゾーン分けで差をつけることが必要ではとの意見が出た。
白谷雲水峡内でもさつき吊り橋まで、苔むす森まで、太鼓岩まででゾーン分けが必要かもしれないとの意見も出た【古賀】
- 白谷雲水峡は自然を考えると今のままがいいのだが、安全を考えるとこのなかでランク分けしてもいい。【土屋】
- アクセスがいいので、山に慣れていない人でも来やすい。ある意味でここを犠牲・ここを代表とさせてしまう。別の言い方をすれば、「奥までいかななくても屋久島いいところはここで見れる」という所にしてしまう。そうになっている【土屋】
- 白谷雲水峡、レク森の中でも簡易なROSをやってもいい【土屋】
- 一言で白谷雲水峡と言っても難易度がかなり異なる印象を持った。弥生杉コースは、遊歩道レベルだが、さつき吊り橋コースと奉行杉コースの分かれ道から先は利用者に難易度を明確に伝える必要がある。渡渉点が多い奉行杉コース入山については、雨天時には入山を控えさせるのが賢明だろう【柴崎】
- さつき吊り橋コースについては渡渉点に吊り橋を設けるなどの整備を施す方法が考えられる。ただし気を付けなければならないのは、渡渉点に吊り橋を設けると、アクセスが容易となり、太鼓岩を訪問するお客さんの数が急増するリスクを抱えることになる【柴崎】

- 白谷雲水峡の入り口周辺については、もう少し整備が必要ではないだろうか。例えばこの花崗岩の大岩に関しては①今はほんの数段建設されている階段を、全面的に整備する②岩を通らない回路を作り、階段もしくは岩を通るか選択させる、などの対策は必要だろう【柴崎】

(ROSでの原生区域、花山歩道・マイナールート)

- 花山歩道の魅力は原生性であり、それを確実に保ちつつ利用を進めることが重要。利用をコントロールし、制限の中で利用を進めていく仕組みを作ることが非常に重要【土屋】
- 花山歩道、永田歩道は1990年代と比較すると、原始的ではあるのだが、非常に歩きやすく、明るいという印象をもった【柴崎】
- マイナールートでビバークが必要になる場合もある。このため、マイナールートに行く人は事前レクチャーの受講、ガイド同伴、携帯トイレ利用することを設けてもいいのではないかと【古賀】

・登山道浸食、踏圧による裸地化、避難小屋等の老朽化への対応について

<<登山道荒廃等の現状>>

(荒廃箇所への早急な対処)

- 登山道の荒廃がひどい。長期的な登山道管理の指針の必要性と同時に、早急な措置が必要。ここまで荒廃が進んだら、修復を必ず始めるというような整備をするときの基準のポイントを予め設定すること、場所ごとに設定することも必要【土屋】
- 永田岳、翁岳に降りる辺りについては、非常に深掘れしている状況。修復措置をとらない限り、人の利用を制限したとしても自動的にどんどん掘れていってしまうというのは今後も続く。早急な対処が必要【吉田】
- 1990年代は、焼野三叉路から永田岳までの荒廃は今ほどに広がっていなかったような印象がある。奥岳地域はちょっとしたことで環境が激変する場所であると痛感した【柴崎】

(軽微な補修では対応できない施設の老朽化)

- 平成9年の縄文ルートの木道整備がされてから約20年が経過している。木造物なので、軽微を越える補修ではないと対応できない場所も多々ある【伊熊】

(最低限の整備の必要性)

- 当たり前のことが現状できていない。協力金については集金データを把握している。それをつかって整備すればいいのではなくて、管理するのは誰なのか、そこはしっかりと考えてもらいたい。何に対しても協力金を使うものではない【伊熊】
- 淀川登山口の協力金徴収での登山者の感想として、最低限の整備ができていないと苦言を言われている。携帯トイレブース扉開閉、石塚小屋トイレドア開閉、石塚小屋・高塚

小屋・鹿之沢小屋・淀川小屋は雨漏り。最低限の整備が必要【古賀】

- 施設ごとで管理責任者、設置者が違うので、最低限の情報交換やすり合わせも重要。その中で、それぞれの施設の、なるべく改善の方向で考える意識醸成が必要。この場というより作業部会が必要【土屋】

(施設管理者の予算確保と環境保全協力金)

- 施設は管理者が予算をつけて維持管理していくのが原則だが、最低限のところできていない状況。そういう中で協力金をいただいているというところが非常に辛い。最低限の修理ができていなかったら、納得してもらえない。これは管理者のそれぞれの主体が、早急にやってもらった上でそれでもだめだったら協力金を使ってでも、他の主体の所につかっても緊急にやらないとならない。お金を払ったのに、最低限の事もやってくれないと投書が新聞に載ったら、協力金制度自体が批判を浴びてだめになってしまう【吉田】
- 施設維持管理の費用を協力金に頼るのではなくて、まずは施設管理者が最低限の施設管理費用を確保しなければならないという意見はあり、その通りだと思う。しかし県というレベルでいくと、管理施設が多いなかで、十分な管理ができないという現状もある。今後の維持管理を含めた枠組み、過去に県が作ったから県が管理をするとかの議論ではなくて、関係機関で協力金制度をうまく活用できないかという考えを持っている【迫田】
- 協力金をいただいている限りはトイレの管理をしてキレイにしていく、し尿を持ち運ぶことは当然続くと思っている。まずは、そこに財源を充ててトイレの管理をしていく。登山道については軽微な補修等が用途として想定されており、それをやっていく。協力金をいただいている限りは、目に見えた整備をして、協力金の効果をはっきりさせていく【矢野】

(花山歩道の現状)

- 花山広場を越えた先は崩れのひどい場所があったが、1990年代当時にはなかったと記憶している。原生的な場所でも、侵食等の変化が起き始めているような気がした【柴崎】

(縄文ルート現状)

- 大株歩道から上では木道は、もともと世界遺産後、木本類の根の保護のために作られたものであり、老朽化が進んでいる【古賀】

(管理者間の連携)

- パトロールの情報交換は実はあまりできておらず、どこが壊れているとかそういう情報交換がまだできていない状況【古賀】

・公園計画上の位置づけがないルートの取り扱いについて

- 地元の人だけが知っている秘密の場所が、だんだんと知られていき、ガイドの利用もされて、人数も増えて行って、結果的に施設も整備されていった。あれを繰り返すと、どこかでそれを覚悟して止めて行かないと、際限なくやってしまうとリスクも高まる【柴崎】
- 観光利用を進めていってしまうと、太鼓岩だけでなく、高盤岳も今では案内されている。石塚山も行く人が増えている。だんだん屋久島の知られてなかった部分が、どんどん知られていく方向になっていく。それは屋久島の魅力を伝えることなのか、むしろ消費して使い捨てしているのではないか。どこかで情報の制限が必要【柴崎】
- 太鼓岩はメディアにのって、なし崩し的に使われていった。高盤岳（豆腐岩）もどこかにとりあげられたら、とめようがなくなる【古賀】
- 登山道の議論する範囲というのは、先に利用が進んでしまったら、危険が出てしまうので考えざるをえなくなる【土屋】

・山岳トイレのし尿処理と携帯トイレについて

(検討会の役割について)

- より具体的な話しは山岳部保全利用協議会で行い、この検討会では将来的な方向性やビジョンについてすり合わせ、関係者の意見を聞きながら少し前に進む方向で考えていくというのがこの検討会の役割だと思う【土屋】

(検討の進め方について)

- トイレ整備の仕方も、山頂まで行くつもりがない、そのぐらいの気持ちの人にまで携帯トイレを使ってくださいとするのか。あるいはそこが最後のトイレなのでそこから先は携帯トイレになるとするのか。淀川小屋が世界遺産地域の入り口のぎりぎりのところということもあるため今後の検討課題【吉田】
- トイレの問題については、これは色々な議論が出てくるかもしれないが、質の高い自然体験というものにトイレがどう関係してくるかということになる。質の高い自然体験では、豪華なトイレをつけるのは質の高いという意味にはならないと思う【吉田】
- バイオトイレに移行できるのであればそちらのほうにしていくという方がふさわしい。但し、汲み取り式トイレを全てバイオトイレに代えれば解決するというのではなく、場合によっては汲み取り式トイレもなくしてしまっただけで全部携帯トイレにしてしまうことも質の高い自然体験になると思う。

屋久島ではこのように決めて、山の環境を悪くしないためにも、あるいは山小屋の周辺で悪臭がするような状況、汲み取り式トイレの染み出しの問題等で水環境に影響を与えないためにも、携帯トイレのボックスを設置しているのだと、みんなが覚悟して入山するということが質の高い自然体験になり得る。そこはきちんと考えていかないとはいけ

ない【吉田】

- 携帯トイレというのは実際使って、登山口まで下ろした後は島の中でどのように処理されているのかまで考えてもらいたい。トイレというのが最終的に屋久島で里までいってどうなるのかまで考えていただけると面白いのではないかと【古賀】
- 山奥の場所についてはやはりローテクでやるしかないのではないかと。屋久島の山奥に関してはトイレの話や施設整備の話は覚悟を決めて、やるしかない時代にきているのではないかと【柴崎】
- 科学技術だけでとても対応できる山ではないというのが正直な感想。ローテクでできる限りのことをやっていくという案が結果的には長期的にはローコストにもつながるのではないかと【柴崎】
- 現在のトイレをすぐ壊せということではなく、新設はしないとかそれが使えなくなったら必然的に携帯トイレに移行するという覚悟を決めるくらいがよいのではないかと。縄文杉ルートだから無理なのではなく、むしろ日帰りの方がやりやすい点もある【柴崎】
- 方向性をしっかり出すというのが大事【土屋】
- 携帯トイレだけ推進すると言うのではなく、今後議論するゾーニングの中でどういった方向がふさわしいのか検討してふさわしい方向にもっていくことが必要【吉田】
- 覚悟をもって山に入るところは携帯トイレ中心となる等の議論はしてもいいと思う。きちんと議論して、どのようにしていくのかを決めたほうがいい。今のような汲み取り式トイレの状況を「仕方ない」と言っているのは時代遅れで「質の高い自然体験の提供」を議論している場にはなじまない【吉田】
- トイレについては難しい問題、大きなテーマなので、専門部会が必要【中川】
- これからはゾーニングが大事になってくる。現状の利用状況もあるが、将来的にどこまで利用を優先するのか、どこまでならバイオトイレが可能かというような物理的なことも関係してくると思う【吉田】
- 携帯トイレありきというのは、現実的にできるのかを含めて疑問である【水柿】
- バイオトイレを山小屋に設置できないかという意見も出たが、バイオトイレは基本的に電気が必要なトイレなので同じ型のものを山小屋設置するのは難しいとの意見が出た【古賀】
- 変えないとしかたないので、徐々に変えて行くしかない。それが20年後か30年後かもしれないが、それに向けて進めていく。ただし、利用が多いところはすぐには進まないと思う【土屋】

(これまでの対応について)

- これまでの対応は全てなし崩し的に行われたことに対する場当たりの対応しかされてこなかったというのが正直な感想。全面携帯トイレは極論だという意見があったが、トイレがあれば山に整備されてきた状況が、逆に極論のやり方をしてきたのではないかと。

結果的にそれ（トイレ等の施設整備）でどんどんお客さんが増えるという現象があり、維持管理費が膨大に増えてくることになる。それにどうやって対応するかを今考えなければいけない時期にきている【柴崎】

- 現状を行政がどう捉えてどういう方向で進もうとしているのかが明らかになっていない【大山】

（汲み取りトイレの現状について）

- 汲み取り式トイレの周りに汲み取りの柄杓とかバケツが横に置いてあるのがすごく目に付く状況にあるというのは、質の高い自然体験をする場所としてはあまり適切ではない。汲み取り式トイレであっても、ああいうものが目に付くような形で置いてあるという状況はなくしていかなければならない【吉田】
- 汲み取り式トイレは衛生面、悪臭、トイレ内が暗いことからや恐ろしさがある【土屋、吉田】
- 夏場の汲み取り式トイレにはハエもいてなかなか利用できない。あれを利用するには本当に勇気がいる。そういう環境が果たしていいのかどうか色々な問題がある。今後の方向性を持っているのかその辺が全然これまで示されていない。【大山】
- 今のような汲み取り式トイレの状況を「仕方ないと」言っているのは時代遅れで「質の高い自然体験の提供」を議論している場にはなじまない【吉田】

（携帯トイレの推進について）

- 携帯トイレを持つてはいるけれどもなかなか使う人が少ないというハードルをどう越えるかというのが一つあると思う。また、山岳部では携帯トイレの推進ということは今後もやっていかなければならない【吉田】
- 携帯トイレについては、最初のきっかけさえ越えれば結構使えるものだと思う。デザイン性、利用性についてはもう少し改善して一般の方にも受け入れやすいような工夫をしていけばよいのではないか【柴崎】
- 小屋型の携帯トイレは衛生面で非常にきれいだった。汲み取り式トイレは衛生面、においや恐ろしさがあるが、少しコストがかかるけれども設備として水準の高い携帯トイレを普及していくことがひとつ重要なのではないか【土屋】
- 携帯トイレに関して、こういった会議でいつも出るのが全部携帯トイレにしたかどうかという話。それは極論なので、自分たちの立場からするとそれは難しい。それぞれのルートごとに考えてもらえると助かる。全部という意見だとなかなか前に進まないと思う。まずできる対策というのを話して頂きたい【古賀】
- 全てのお客さんにマナー・モラルを守ってもらえる環境にもっていけるのか疑問なところはある。0か100の話ではなく上手に併用していくことを考えることが大事ではないか【伊熊】

- 事前に携帯トイレ利用についての情報がないのと、あるのとでは大分変わってくる。ハード面とソフト面の両輪が重要かと思う。【加藤】
- 世界遺産の屋久島の自然を保っていくために、利用者にも自然を保っていることを体験させるためにも携帯トイレを使用することを、ガイドの皆さん等から強く進めることはできないものか。そういったことが屋久島の保全につながっていくと思う【日高】
- 携帯トイレについては環境政策課なので保護という立場になるが、保護という観点からすれば携帯トイレ利用が進んでいけばいいと思っている【矢野】
- 益救参道にはトイレがなく、若い女の子たちは携帯トイレを使っていたので、利用にはあまり抵抗がないと感じた。携帯トイレ利用は十分に普及できると感じた【吉國】
- 携帯トイレブースは各箇所には1つしかないため混雑時には対応できないのではという意見も出た。特にトロッコ道沿いの既存のトイレが故障した場合、携帯トイレを補完的に使うが、今の携帯トイレブースの数では対応できない状況【古賀】
- 縄文ルートは縦走登山よりも持ち運ぶ時間や個数が少なかったため、個人的には携帯トイレの利用推奨は妥当だと思った。ただし現状では下記のとおり
 - ①携帯トイレが補完的利用の為、ブースが圧倒的に少ない
 - ②利用に対する心理的負担
 【柴崎】
- 携帯トイレの本格化を進めるのであれば、港・空港・文化村センター、役場（支所も含む）など里で捨てられる場所を増やした方が良かったと思った。それが財政的に厳しい場合には、下山口にもっと大きな看板を作るとよいかも【柴崎】

3. (5) 安全 に関する意見

- ・自己責任と施設等管理者がすべきことについて
- ☆登山者の自己責任の範囲と、管理者の管理責任の範囲
- 林野庁でも、以前、レク森担当者と議論したが、管理する立場からは「ここから先は責任をもつ」、「ここから先は責任が持てないので入らないで」という、0か1にしたスタイルだと管理もしやすいので、そういった議論がでてきてしまう。基準がないとそうになってしまう。ROSのような形で、それぞれについてグレードをつけると、それぞれで自己責任の程度が変わってくる。【土屋】
- 一番施設整備が進んでいる所は、管理者の責任度が高いというようなグラデーションで考えるということが今回の検討にも含まれている。これはやはり、管理者や利用者が合意して取り掛からないと、誰かが思っている、他の関係者が思っていないと、大変なことになってくると思う。【土屋】
- 林野庁は多面的機能を発揮する責務を負っている中で、その中で森林レクリエーションだけ切り離すやり方は望ましくない。ガイドといった多様な利害関係者とも議論していただいて関わってもらいたい【柴崎】

☆自己責任について

- 人数制限しないためには、ピンクテープを設置しない、ヤブコギしないといけないようにするという方法もある【柴崎】
- 自己責任をどこがとるかというのは非常に難しい。どちらかという、自己責任に全部まわしていったほうがいい。昔は山に入る時には、登山の本が沢山出版されていたので、そういった本を読んで勉強して、山は危険だということで、自分の責任で体験しながら登っていく。そのため、あまり問題は発生しなかった【大山】
- 個人の権利を主張するととりとめがなくなってしまう。その辺が心配である。屋久島はそれでいいのだろうか。屋久島なりの独自の線を出してもいいのではないか。屋久島の山は自己責任とし、行政の捜索隊は有料にするが、登山者は保険に入るというように、保険をかけて山に入る【大山】
- 自己責任をある程度やれるためには、それを意識できているような登山者をつくっていかなくてはならない。学習的な面と教育的な面を含めていく。管理のシステムの方も作っておかなくてはいけないので、トータルでパッケージのようなものを作らないとできない【土屋】

☆施設等管理者がすべきことについて

(登山道の管理者と管理責任)

- ・登山道の管理者の明確化
- 今まで屋久島の国有林の中の歩道の管理者が明確になっていないところが多かった。今年度から国有林、環境省、鹿児島県、屋久島町といったところが集まって、2回会議をした。非常に遅いという状況ではあるが、歩道管理者を明確にするということで、作業に着手した【佐藤】
- ・さまざまな形態の登山道の管理責任
- (登山道の管理責任は)判例ごとに違っていて、個別ケースをみななければならない。ただし傾向としては利用の実態がよく考慮されることになる。屋久島で得るべき教訓としては、利用者の動向の数や、利用する人の形態が、訴訟が起きた場合に影響を及ぼす事になってくる【柴崎】
- 平成15年に奥入瀬溪流の国有林で観光客の女性に枯れ枝が落下して直撃した事故があった。それ以降は行政の方で、登山道整備やベンチ設置について、全国的に若干及び腰になっている感じがする。【古賀】
- 岳参りのように自然発生的な歩道については、当面は利用される方の自己責任を明確にするような看板を設置して対応していく。これについては、環境省、鹿児島県、屋久島町は了承している。自然発生的な歩道は、今後整理して進めていく。【佐藤】

- 屋久島で自然発生的にできてきた岳参り等の歩道は含まずに、観光地として人が入ってくることを認めた歩道のあり方を明確にする。それ以外については、ひとまず立入禁止としておかないと、勝手に誰かが入った時に事故があると困る【佐藤】
- 国有林の作業用の歩道と観光用の歩道は、歩道の入口では明確に分かれておらず、どちらも人が歩ける歩道になっている。あくまでも、観光歩道ではない歩道については、一般の方々立ち入り禁止という規制をかける。もし、立ち入り禁止の制限を設けた歩道に入るのであれば、「自己責任で入ってください」という看板をたてている【佐藤】

(最低限の整備の実施と環境保全協力金)

- 当たり前のことが現状できていない。協力金については集金データを把握している。それをつかって整備すればいいのではなくて、管理するのは誰なのか、そこはしっかりと考えてもらいたい。何に対しても協力金を使うものではない【伊熊】
- 淀川登山口の協力金徴収での登山者の感想として、最低限の整備ができていないと苦言を言われている。携帯トイレブース扉開閉、石塚小屋トイレドア開閉、石塚小屋・高塚小屋・鹿之沢小屋・淀川小屋は雨漏り。最低限の整備が必要【古賀】
- 施設ごとで管理責任者、設置者が違うので、最低限の情報交換やすり合わせも重要。その中で、それぞれの施設の、なるべく改善の方向で考える意識醸成が必要。この場というより作業部会が必要【土屋】
- 現実にメンテナンスを様々な民間の方や、ガイドの方がやられていることは、他地域でも多い。そういった方々が意見を言える場を作っていく事は重要である【土屋】

(施設管理者の予算確保と環境保全協力金)

- 施設は管理者が予算をつけて維持管理していくのが原則だが、最低限のところできていない状況。そういう中で協力金をいただいているというところが非常に辛い。最低限の修理ができていなかったら、納得してもらえない。これは管理者のそれぞれの主体が、早急にやってもらった上でそれでもだめだったら協力金を使ってでも、他の主体の所につかっても緊急にやらないとならない。お金を払ったのに、最低限の事もやってくれないと投書が新聞に載ったら、協力金制度自体が批判を浴びてだめになってしまう【吉田】

(管理者間の連携)

- パトロールの情報交換は実はあまりできておらず、どこが壊れているとかそういう情報交換がまだできていない状況【古賀】
- ガイドの方は、一番山に入っているのだから、例えばどこかの登山道が崩れている、倒木がある、危険な状態、事故が起きている、というような情報は行政も含めてガイドに伝わるといいと思う【土屋】

- 施設ごとで管理責任者、設置者が違うので、最低限の情報交換やすり合わせも重要。その中で、それぞれの施設の、なるべく改善の方向で考える意識醸成が必要。この場というより作業部会が必要【土屋】

(登山者への情報発信と、安全確保についての注意喚起)

- 雨が降った時には、石、木造構造物、カーブになっている木の根がとても滑り、危険と隣り合わせにあることを感じた。降水時には増水するなどを、どう伝えていくかというのは重要かと思った【柴崎】
- どこまで整備しても絶対に事故は起きる。山に行くときには事故はつきものだということを、国民に認識させる場とする。ここは自然と人間がどう対峙していくかということで、非常に厳しいところである。人間側がもう少し謙虚に自然に接する事を教育する場とすることを強めていくことが屋久島の特徴【大山】
- 番号を連番で振ってほしい。屋久島全体で連番を振ってほしい。例えば事故が起こった時には、1のエリアで事故が起こったという情報を消防等に伝えやすい。【古賀】

4. 使用による自然への負荷軽減について

4. (1) 利用者が持つべき意識について に関する意見

6. その他

6. (1) 地域住民の山岳部および山岳部利用に関する関心・意識 に関する意見

- 島民の多くは、日々の暮らしと山との関係が希薄で、山がどのように使われているのか知る機会は少ない。昔は平木とりのために屋久杉が伐採され、今では観光に利用されているが、観光でどのように山が利用されているのかを自分の目で見て知っている島民は少ない。
- 昔から岳参りは山と集落が関係をもつ機会であったので、心の部分での山との付き合いはあった。
- 屋久島に残されている資源には島民は気が付かないが、山・川・海と屋久島の子供たちが一番の資源だと思っている。現在は「山ん学校」開催で屋久島の自然を子供たちに伝えている
- 精神面でも集落と山は密接につながっており、死んだ人は山に登って神様になり、山の上から集落を見守り、時には集落へ降りてくると信じていた。山は信仰の対象であると同時に死んでから行く場所でもあった。
- 山は生活の場ではなくなったので、心のよりどころだけになった
- 屋久島では山菜食がなく、植物の名前がついていない。方言がないということがあり、日常生活面での山との関わりの少なさを現しているのではないか
- 保護活動期以降は、屋久島住民が自然保護との関わりが希薄になった

6. (2) 保護地域管理者・施設管理者が持つべき意識と果たすべき責任 に関する意見

(前置き)

- 観光地として、お客様を呼んでいるわけなので、呼んでおいてトイレ等の整備は難しいということはないと思う。予算はつけられないのかもしれないが、呼ぶだけではなくて、それに対して気持ち良く利用して帰っていただくことを前提に議論すべき【水柿】

☆ 平成 29 年度に検討してきた内容

【検討内容】

- ①屋久島山岳部の適正な利用に関するビジョンについて
 - ・理念、目指す姿（目標）と目標実現のための基本方針 等
- ②適正利用のためのゾーニングについて
 - ・ゾーニングの設定

検討会	議論すべき論点(案)
第 1 回検討会	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 10px;">1. 前提となる考え方について</div> <ul style="list-style-type: none"> (1) 伝統的な自然観・人と自然との関わりについて (2) 自然環境を損なわない範囲、方法での利用について (3) 屋久島(山岳部)の価値、魅力、らしさについて (4) 次世代への継承について <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 10px;">2. 屋久島山岳部の保護と利用の「目指す姿」又は「あるべき姿」につ</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 10px;">いて</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 10px;">4. 利用による自然への負荷軽減について</div> <ul style="list-style-type: none"> (1) 利用者が持つべき意識について (2) 利用者が負うべき義務について <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 10px;">6. その他</div> <ul style="list-style-type: none"> (1) 地域住民の山岳部および山岳部利用に対する関心・意識について (2) 保護地域管理者・施設管理者が持つべき意識と果たすべき責任につ <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">いて</div>
第 2 回検討会 現地視察	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 10px;">3. 利用者へのサービスについて</div> <ul style="list-style-type: none"> (3) 利用施設の整備と維持管理について (5) 安全について

<p>第3回検討会 現地視察</p>	<p>3. 利用者へのサービスについて</p> <p>(1) 対象者について (2) 質の高い利用体験の提供について</p> <p>4. 利用による自然への負荷軽減について</p> <p>(1) 利用者が持つべき意識について (2) 利用者が負うべき義務について</p> <p>6. その他</p> <p>(1) 地域住民の山岳部および山岳部利用に対する関心・意識について (2) 保護地域管理者・施設管理者が持つべき意識と果たすべき責任について</p>
<p>第4回検討会</p>	<p>5. ゾーン設定の考え方について</p> <p>※第4回では議論はしないが、「3.(3)」でゾーン設定について議論している</p>

※検討会の間に、意見交換会やヒアリングを実施

◇ 平成30年度に検討する内容

【検討内容】

②適正利用のためのゾーニングについて

- ・ゾーニングの設定
- ・ゾーニングごとの(管理)目標・方針 等

③施設の整備、維持管理について

- ・施設整備の方針、内容、整備水準、維持管理の方針 等

検討会	議論すべき論点(案)
<p>複数回</p>	<p>3. 利用者へのサービスについて</p> <p>(1) 対象者について (2) 質の高い利用体験の提供について</p>

	<p>(3) 利用施設の整備と維持管理について</p> <p>5. ゾーン設定の考え方について</p>
--	---

◇ 平成 31 年度、平成 32 年度に検討する内容

【検討内容】

- ③施設の整備、維持管理について
 - ・施設整備の方針、内容、整備水準、維持管理の方針 等
- ④利用者管理とサービスの提供について
 - ・利用者管理の方針、方策
 - ・利用者へのサービス提供の方針、方策 等
- ⑤その他
 - ・モニタリング
 - ・その他山岳部の適正利用に関する必要な事項

検討会	議論すべき論点(案)
複数回	<p>3. 利用者へのサービスについて</p> <p>(2) 質の高い利用体験の提供について</p> <p>(3) 利用施設の整備と維持管理について</p> <p>(4) 情報提供について</p> <p>(6) 人材育成について</p>